

三州瓦の歴史は古く、奈良時代のころからここで瓦が焼かれていた記録が残っているほど。中でも矢作川の三角州の末端に位置する高浜市は瓦に適した土が採れるため、現在も原料の産地となっている。そんな高浜市に工房を構え、鬼瓦を作るのが岩月久美さん。彼女がどのように鬼瓦職人＝鬼師になっていったのかを伺ってみた。

鬼師

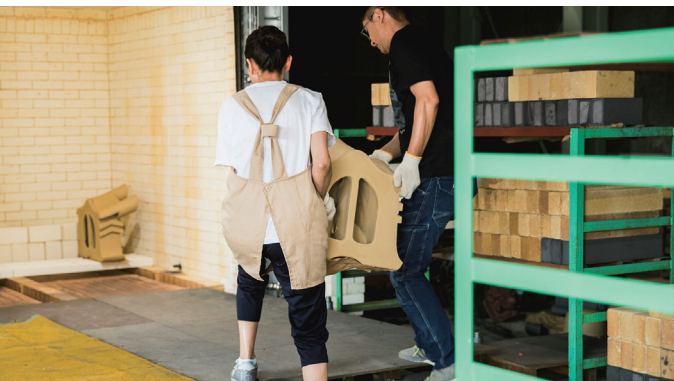
特集:コネコネ カチコチ、鬼瓦の旅

屋根の上の鬼瓦は、現代に何を想う

日本の三大瓦の一つ・三州瓦の名産地、愛知県高浜市。

そこで鬼瓦を作り続ける鬼師の暮らしと生業を覗いてみた。





屋根に乗せればなんでも鬼瓦になる

定番の鬼面からシンプルな造型のものまで、
鬼瓦のスタイルは意外と多岐に渡っている。

鬼瓦は基本、型紙がありそれに沿って粘土が切り出される。とはいえ鬼面や獅子といった複雑な立体物は粘土を重ねて形を作られるため、職人のセンスと技がそこで試される。造型は、ほとんど金属ヘラ1本で行われ、この製法は鬼瓦伝来の頃から変わらないのだそう(当時は木ベラを使用していた)。大まかに形を作ったものは、ヘラで表面を削りながら形を整えている。また、鬼瓦は屋根の上に乗せるものなので、なるべく軽く仕上げる必要がある。そのため多くの鬼瓦は中が空洞となっている。とはいえ焼成前は、大人二人で持ち上げるのがやっとなぐらい重く、特に女性鬼師の久美さんは、運搬するのに困ることが多いと話す。

する。造型が完成すると約8時間かけて乾燥、その後、時間かけて特製の窯で焼成を行う。焼成から24時間後に窯から出し、屋根に取り付けて完成となるわけだが、大きいものは何分割かにして運搬し、屋根の上で組み合わせるのだそう。ちなみに久美さんが作った最大の鬼瓦は、畳8畳ほどの大きさがあったのだとか。それでも大きな寺院だったため、屋根の上に付けるとそれほど大きく感じなかったと、久美さんは当時を振り返りながら話してくれた。

38 30

鬼師の日常はシンプルで、朝8時ごろ工房に入り、それからほぼ一日粘土と向き合い造型

鬼瓦は棟瓦の端に付けられ、主に厄除けとされることが多い。そのほか、家紋や福の神といったその家の願いを象ったものや、水という文字を描き防火を願うものなどもある。つまり鬼瓦とは、家や建物に対する願いやそこに住む人の想いを形にしたもの。だからこそ、その形は建物ごとに異なる。そんな鬼瓦を一つずつ手作業で作る職人を鬼師と呼ぶ。今回作業を見せてくれた「岩月鬼瓦」の岩月久美さんも鬼師の一人だ。

鬼瓦は棟瓦の端に付けられ、主に厄除けとされることが多い。そのほか、家紋や福の神といったその家の願いを象ったものや、水という文字を描き防火を願うものなどもある。つまり鬼瓦とは、家や建物に対する願いやそこに住む人の想いを形にしたもの。だからこそ、その形は建物ごとに異なる。そんな鬼瓦を一つずつ手作業で作る職人を鬼師と呼ぶ。今回作業を見せてくれた「岩月鬼瓦」の岩月久美さんも鬼師の一人だ。

鬼

瓦といえはおどろおどろしい鬼の顔を思い浮かべ



何の気なしに入った工房 そこでハマリ今では鬼師に

久美さんが鬼師になった理由は嫁ぎ先が鬼瓦を作っていたから。
しかし、そこから彼女の運命は大きく動き出した。

実

鬼師になるための特別な資格などはない。そのため、高浜市内の鬼瓦工房の多くは家族で経営している。岩月鬼瓦もそういう工房の一つだが、それでも女性が鬼師をするのは珍しい。そんな鬼師に久美さんはなぜなったのだろうか。

「私が鬼師になった理由は、単純に嫁ぎ先が鬼瓦の工房だったからです。鬼師の主人を手伝ううちに自然と自分でも鬼瓦を作るようになりました。小さな工房なので、最初から大きな作品を手がけたんですが、それが楽しかったんだと思います。趣味程度に刺繍や洋裁はしていたので不器用な方ではないと思いますが、まさか鬼師になるとは思っていませんでした」と久美さんは鬼師になった経緯を振り返った。彼女に鬼師をしていて一番やりがいを感じる場面はどんなところか

も伺った。

「鬼瓦というのはご覧の通り、すごく大きなものもあります。そういったものは何分割かして作るのですが、左右を同じ形に作る作業はとても難しいんです。少しでもズレると合体させるときに合わないの、とても慎重に製造を行います。また焼くと10パーセントほど縮むというの也要がります。そういったことを考えつつ作り、最終的にピッタリと合った時は本当に嬉しいですね。また、自分の作った鬼瓦が屋根の上に乗っているのを見るのも大好きな時間です」。

ふとしたきっかけで鬼師となった久美さんだが、それが意外と自分に合っていたと久美さんは話す。まだまだ勉強することもあるので、師であり夫でもある秀之さんとともに精進の日々を送っている。



普段は地元のラジオを聴きながら鬼瓦の製造に精を出す久美さんと秀之さん夫妻。
祖父や父も鬼師だった秀之さんは、生まれた時からずっと鬼瓦と暮らしていたのだそう。

鬼瓦の技術を現代に活かす

鬼瓦の造型や焼成といった技術を活かし、
現代にマッチするアイテムを創出する。

こ ちらの工房では、新たな鬼瓦の製造はもちろん、古い鬼瓦の修復も行なっている。修復を行う際は、当時の時代背景を鑑みながら、取り掛かる必要があると久美さんの師である秀之さんは話す。例えば現代においては稚拙な作りであっても、それを作り変えるのではなく、時代背景と合致させて当時の姿を修復しなければいけないのだ。修復は残っている部分の距離を測り、それに合わせて欠損した箇所を復元していくのだとか。作り足す箇所は焼成するので、10パーセントほど大きく作らないといけないのだが、それが修復する上で難しい点だと久美さんは話す。

ほかに、鬼瓦の造形技術を使ったインテリア雑貨やアクセサリーなども、ブランドを立ち上げて展開している。



招鬼猫

久美さんが考案した鬼瓦の造形技術を駆使した「招鬼猫（まねきねこ）」。1400年前、仏教と共に大陸から船で海を越え、伝わってきたと言われる鬼瓦を、招き猫にアレンジしたもの。牙を生やしているものと、鈴をつけている2種類がある。また、招鬼猫をプリントしたTシャツなども販売中。



GaRock "The Bricks"

久美さんが立ち上げたインテリアブランド「GaRock（ガロック）」が展開するインテリア小物「The Bricks（ザ ブリックス）」。コンセプトに「侘び・寂び」、「数寄屋」、「いぶし銀」を取り入れ、日本の美意識を数字や英文字で表現する。



GaRock "Accessory"

久美さんが造型した鬼瓦を3Dスキャナーで読み込み、Digital Clayや3DCADを使用して作ったのがこのシリーズ。鬼瓦の繊細で、複雑な造形を現代の機器を利用することで、より親しみやすいアクセサリに変えることが可能となった。鬼瓦の造形美を胸元でも楽しんで欲しい。



小皿

瓦を割ったような造型が印象的な小皿も久美さん考案のアイテム。三州瓦らしい焼けた色合いに、鬼瓦にも用いられる幾何学模様を配することでよりモダンな印象となっている。足が付いているので、キーホルダーとしても重宝しそうな一品。



鬼瓦の修復・復元

岩月鬼瓦には全国の神社・仏閣から鬼瓦の修復や復元の依頼がくる。歴史的建造物の修復や復元は、必ずそれを調査する先生の指導の元行われる。秀之さん曰く、地方にある古いお寺や神社の鬼瓦は、当時の村の人が作っていたことが多くそのため作りが稚拙なことが多いのだとか。その稚拙さまでも復元することも現代の鬼師の役割りなのだ。また、細かな傷なども忠実に作り直す必要があるため、先生とのやり取りは密に行われる。※写真は滋賀にある寺院の鬼瓦の修復（上が修復前、下が修復後）。

鬼師として、夫婦仲良くいつまでも

これからの鬼師として、どんな道を歩んで行くのだろうか。

現 代の住居は、居住スペースが多く取れるマンションが主となっている。その影響もあり、鬼瓦を飾る家も少なくなっているのは岩月夫妻も感じているようだ。

「昔は自然が怖く、火事が怖かった。だからこそ、屋根に厄除けとなる鬼瓦を置いて家の安全を願ったのです。しかし技術が進歩し、自然の脅威も少なくなっただけで、家屋も機能性が重視されるようになりました。その状況を見ると私たちは斜陽産業にいますと実感せざるを得ません」と話すのは秀之さん。しかし、その状況を悲観するだけで終わらないのが彼らだ。

「例えば、3D機器を導入したり、鬼瓦製造の技術を使ってインテリアを作ったりするのは、全く抵抗感がありませんでした。むしろインテリアやアクセサリを通じて、若い世代が鬼瓦に触れられる機会を作ることにも私たちの役目だと思います」と久美さんは話す。彼らは鬼瓦の技術を鬼瓦だけに留めるのではなく、「GaRock」というブランドを立ち上げて、インテリア小物やアクセサリを発信してい

る。さらに、体験教室も開催するなど、より多くの人が鬼瓦に触れられる機会を作っている。「体験教室は、実際に私たちが作るサイズと同じぐらいのものを皆さんに作っていただき、それが珍しいのか、みなさんには喜んでもらっていますね」と、体験教室の感触について久美さんは話してくれた。

最後に彼女は「鬼瓦を作りたいという若い人も教室で見かけるので、彼らに自分の技術が提供できる日までは、師匠でもある主人とこの工房を続けていきたいです」と笑った。

焼成のための窯入れも、大きな鬼瓦の製造も全て夫婦二人で行っている。師と弟子、夫と妻という関係以上の絆を二人から感じることができる。伝統的な技術だけでなく、現代の技術も取り入れながら鬼瓦という間口を少しでも広げようと奮闘する二人が、この業界を変えていくのかもしれない。鬼瓦だけに止まらない二人の活躍にこれから大いに期待したい。



今回の旅のメモ。

今回の旅で訪れたのはこちらです。

profile

岩月久美 / 鬼師

現在、500棟を超える神社仏閣用の鬼瓦の製作を行う久美さんだが、「岩月鬼瓦」代表の秀之さんと出会うまで、鬼瓦を触ったことはなかったのだそう。そんな久美さんが鬼師になったきっかけは、単純に自分もしてみたいと思ったから。土を触ることも造型を作ることも彼女にはあっていただ。現在も鬼師としての技術を秀之さんに学びながら、ダイナミックでどこか女性らしさのある鬼瓦を日々作り続けている。また、鬼瓦の技術を生かしたアクセサリーやインテリア雑貨を扱う「GaRock」も展開し、その可能性を世界に向けて発信している。

岩月鬼瓦
愛知県高浜市田戸町7-3-43
<https://oni93.com>



access

岩月鬼瓦
まで

【公共交通機関で】…中部国際空港セントレアからリムジンバス中部国際空港線知立駅行きに乗車、刈谷市駅下車へ。
名鉄刈谷市駅から三河線で高浜港駅へ。高浜港駅から田戸町方面へ、徒歩約17分。
【車で】……………中部国際空港セントレアからセントレアライン、知多横断道路を経由し、知多半島道路阿久比ICを出る。
県道46号線を高浜市方面へ。車で約35分。

more information

岩月鬼瓦に関わるあれこれ

work
shop



鬼瓦製作体験

鬼師が指導する鬼瓦製作のワークショップも展開。24cmの粘土の板を加工することができる。顔は基本の鬼を忠実に再現するもよし、自分なりの個性を出してもよし。製作後は、きちんと焼き上げて自宅に届けてくれる。

【開催場所】岩月鬼瓦工場内
(愛知県高浜市田戸町7-3-43)
【料金】7,700円
【所要時間】3時間程度

online
shop



GaRock ONLINE SHOP

岩月鬼瓦が展開するアクセサリー＆ライフスタイルブランド・GaRockのオンラインストア。鬼瓦をモチーフにした人気のシルバーアクセサリーはもちろん、鬼瓦の技法で作るアルファベットの置物「The Bricks」や「招鬼猫」なども多数揃っている。

<https://garock.shopselect.net>

shop



浅草 もり銀

創業80年を超える日本の金銀工芸を取り扱う店。「お客様に、うるおいと楽しさを提案する。」をモットーにした店内には、職人たちが生み出した美しく温かみのある金製品、銀製品が所狭しと並び。また、「GaRock」のシルバーアクセサリーも取り扱い中。

東京都台東区浅草1-29-6
オレンジ通り(浅草公会堂となり)
☎03-3844-8821
www.asakusamorigin.com